琉球大学学術リポジトリ

国際収支統計とマンデル＝フレミング・モデル

メタデータ	言語: ja 出版者: 琉球大学国際地域創造学部 公開日: 2018-11-07 キーワード (Ja): マンデル＝フレミング・モデル, 財政政策, 金融政策, 外貨需給, 介入, 国際収支統計 キーワード (En): 作成者: 徳島, 武, Tokushima, Takeshi メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24564/0002010063

国際収支統計とマンデル＝フレミング・モデル

徳 島　武

抄　録

2014 年の国際収支統計の変更は、マクロ経済政策を論じる基本モデルであるマンデル＝フレミング・モデルとの整合性という点では、後退と言わざるを得ない。旧版は完全に対応していたが、新版は部分的にしか対応していない。

キーワード：マンデル＝フレミング・モデル、財政政策、金融政策、外貨需給、介入、
国際収支統計

1. はじめに

2014 年から日本の国際収支統計が変更された。諸々の事情があろうが、マクロ経済政策を論じる基本モデルである、マンデル＝フレミング・モデルとの整合性という点では、後退したと言わざるを得ない。本論文では、旧版と新版の、そのモデルとの対応関係について、確認する。2.で、国際収支統計と外貨需給の関係を示し、3.で国際収支統計とマンデル＝フレミング・モデルとの対応関係について示す。4.でまとめる。

2. 国際収支統計と外貨需給の関係

1996～2013 年の旧版と 2014 年からの新版とで、国際収支原表の貸方（左側）が外貨の供給要因で、借方（右側）が需要要因であることと、経常勘定は共通であるが、資本勘定は異なっている [1)]。しかし、外貨準備の増加・減少以外の資本勘定でまとめると、需給関係を考慮する場合は共通として分析できる。よって、

外貨供給＝貸方の経常勘定＋貸方の外貨準備の減少以外の資本勘定＋外貨準備の減少

外貨需要＝借方の経常勘定＋借方の外貨準備の増加以外の資本勘定＋外貨準備の増加

となる。但し分析に必要ないので、誤差脱漏は省略している。これらより、

非中央銀行部門の外貨供給—非中央銀行部門の外貨需要＝貸方の経常勘定—借方の経常勘定＋貸方の外貨準備の減少以外の資本勘定—借方の外貨準備の増加以外の資本勘定＝外貨準備の増加—外貨準備の減少＝外貨準備純増加

となるのは、需給均衡条件より自明である。

3. 国際収支統計とマンデル＝フレミング・モデル

マンデル＝フレミング・モデルの国際収支は、

国際収支＝経常収支＋資本収支

＝貿易収支＋資本収支

＝輸出—輸入＋資本輸入—資本輸出

＝外貨準備純増加

であり、輸出は貸方の経常勘定、輸入は借方の経常勘定、資本輸入は貸方の外貨準備の減少以外の資本勘定、資本輸出は借方の外貨準備の増加以外の資本勘定に該当している。よって、

国際収支＝非中央銀行部門の外貨供給—非中央銀行部門の外貨需要

＝外貨準備純増加

となる。国際収支黒字は非中央銀行部門の外貨の超過供給となり、変動相場制では外貨安・邦貨高、固定相場制では外貨買・邦貨売介入、国際収支赤字は非中央銀行部門の外貨の超過需要となり、変動相場制では外貨高・邦貨安、固定相場制では外貨売・邦貨買介入、国際収支均衡は非中央銀行部門の外貨の需給均衡となる。旧版はマンデル＝フレミング・モデルと対応しているが、新版は対応していない事がわかる [2)]。

4. おわりに

国際収支統計の旧版は、マンデル＝フレミング・モデルと完全に対応しているが、新版は経常収支のみが対応している。マクロ経済政策を論じる場合は、財政金融政策だけでなく、特に外国為替市場への介入が説明しづらくなっている点について、注意すべきである。

注

1）国際収支統計については、旧版については国際通貨研究所編(2012)、新版については国際通貨研究所編(2018)を参照されたい。貸方の経常勘定は、財貨の輸出、サービスの輸出、所得の受取、経常移転受取で、貸方の資本勘定はそれ以外、借方の経常勘定は、財貨の輸入、サービスの輸入、所得の支払、経常移転支払で、借方の資本勘定はそれ以外である。

2）新版では、経常収支＋資本収支＋外貨準備増減(＝—外貨準備純増加)＋誤差脱漏＝0 が、経常収支＋資本移転等収支—金融収支＋誤差脱漏＝0 となっている。

参考文献

伊藤隆敏（2013）『インフレ目標政策』、日本経済新聞社
――――・林　伴子（2006）『インフレ目標と金融政策』、東洋経済新報社
岩田規久男（2011）『デフレと超円高』、講談社
岩本武和(2012)『国際経済学　国際金融編』、ミネルヴァ書房
大浦宏邦(2008)『社会科学者のための進化ゲーム理論』、勁草書房
岡田　章(2008)『ゲーム理論・入門』、有斐閣
――――(2011)『ゲーム理論・新版』、有斐閣
小川栄治・岡野衛士(2016)『国際金融』、東洋経済新報社
小川英治・川崎健太郎(2007)『MBA のための国際金融』、有斐閣
翁　邦雄（2013）『金融政策のフロンティア』、日本評論社
奥村隆平(1989)『改訂版　変動為替相場制の理論』、名古屋大学出版会
小野善康(1999)『国際マクロ経済学』、岩波書店
河合正弘(1994)『国際金融論』、東京大学出版会
国際通貨研究所編(2012)『外国為替の知識　第 3 版』、日本経済新聞出版社
――――――――(2018)『外国為替の知識　第 4 版』、日本経済新聞出版社
齋藤　誠・岩本康志・太田聰一・柴田章久(2010)『マクロ経済学』、有斐閣
酒井良清・榊原健一・鹿野嘉昭（2011）『金融政策　第 3 版』、有斐閣
――――・鹿野嘉昭（2011）『金融システム　第 4 版』、有斐閣
清水順子・大野早苗・松原聖・川崎健太郎(2016)『徹底解説　国際金融』、日本評論社
清水　誠(2015)『負の利子率政策』、日本評論社
宿輪純一(2010)『通貨経済学入門』、日本経済出版社
須田美矢子編(1992)『対外不均衡の経済学』、日本経済新聞社
高木信二(1992)『入門|国際金融』、日本評論社
武隈慎一(2004)『マクロ経済学の基礎理論』、新世社
竹中平蔵・小川一夫(1987)『対外不均衡のマクロ分析』、東洋経済新報社
辻　正次・田岡文夫編(2010)『現代国際マクロ経済学[改訂版]』、多賀出版
中西訓嗣・広瀬憲三・井川一宏編(2003)『国際経済理論』、有斐閣
萩原恵子(2008)「経常収支不均衡の調整過程:近年の理論的分析の展望」、『金融研究』第 27 巻、第 4 号、87-124
秦忠夫・本田敬吉・西村陽造(2012)『国際金融のしくみ　第 4 版』、有斐閣
浜田宏一(1982)『国際金融の政治経済学』、創文社
――――(1996)『国際金融』、岩波書店
林　伴子(2003)『マクロ経済政策の「技術」』、日本評論社
平島真一編(2004)『現代外国為替論』、有斐閣
深尾光洋(2010)『国際金融論講義』、日本経済新聞出版社
藤田誠一・岩壷健太郎編(2010)『グローバル・インバランスの経済分析』、有斐閣
――――・小川英治編(2008)『国際金融理論』、有斐閣
藤原秀夫・小川英治・地主敏樹(2001)『国際金融』、有斐閣
二神孝一・堀　敬一(2009)『マクロ経済学』、有斐閣

松林洋一(2010)『対外不均衡とマクロ経済[理論と実証]』、東洋経済新報社
宮尾龍蔵(2016)『非伝統的金融政策』、有斐閣
矢野恵二(1989)『開放マクロ経済学の展開』、白桃書房
Dornbush,R.(1980)*Open Economy Macroeconomics*,New York:Basic Books
Gärtner,M.(1993)*Macroeconomics Under Flexible Exchange Rates*,Harvester Wheatsheaf
Isard,P.(1995)*Exchange Rate Economics*,Cambridge University Press
Krugman,P.R. and M.Obstfeld(2000)*International Economics Theory and Policy fifth ed.*,Addison-Wesley
Mankiw,N.G.(1994)*Macroeconomics second ed.*,Worth Publishers
Mark,N.C.(2001)*International Macroeconomics and Finance*,Blackwell Publishers
Mundell,R.A.(1968)*International Economics*,The Macmillan Company
Obstfeld,M. and K.Rogoff(1996)*Foundations of International Macroeconomics*,MIT Press
Pitchford,J.(1995)*The Current Account and Foreign Debt*,Routledge
Turnovsky,S.J.(1997)*International Macroeconomic Dynamics*,MIT Press
Van der Ploeg,F.(ed.)(1994)*The Handbook of International Macroeconomics*,Basil Blackwell